

---

# 雨と僕と女の子

谷津矢車

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

雨と僕と女の子

### 【Nコード】

N1631C

### 【作者名】

谷津矢車

### 【あらすじ】

高校生の「僕」は、5月のさなか、ある少女に出会う。「普通」という言葉を嫌う、そんな少女に。そんな少女と僕が過ごした日々を、ちよつと眺めてみましょう……。

チリンチリン。

僕は、ペダルをガシガシ踏み込んで、暴走列車さながらに通学路を自転車で走りぬける。

「ドバビュン！」と、まるでマンガみたいなゴキゲンな音を立てて、僕を乗せた自転車は目覚めたばかりの街を縫うように進む。朝からお疲れ様な空気を醸すサラリーマンや、朝帰りと思しきケバいおねえさんをすり抜けて。

いつもだったら、すれ違った人の顔を思い出して、その人の人生模様を考えるのが僕の日課だ。

例えば「朝からお疲れな空気を醸すサラリーマン」氏の場合、「大谷サトシ（45）、妻に息子・娘の4大家族。最近息子が反抗期で、娘も自分のことを嫌っていて、さらには奥さんにも……」  
「みたい。そして、ほくそ笑む。それが僕の日課だ。

だが。今日はそんな暇がない。

なぜかって？それは。目覚まし時計のせいだ。

皆も覚えておいて欲しい。

どうやら、目覚まし時計もストライキを打つものらしい。

目を覚ましたときには、件の目覚まし時計は朝の八時を指していた。タイマーが鳴った形跡はない。

多分、僕が目覚まし時計のタイマーをセットするのを忘れていたのだろうが、それを認めるのも癪しゃくなので、「目覚ましがストを打った」ということにしておこう。しておいてくれ。ていうか、しておいてください。

そんなわけで、いつもはトロトロと自転車を進めている僕だった

が、今日は足の筋肉が引きつって悲鳴を上げるほどペダルを踏み込んで  
いる、という次第だ。

左手のデジタル時計を見る。 8:35の表示。 ああ、こりゃ遅刻  
だ。

「あ、もうダメだ」

僕はペダルを踏むのを止めた。

まったく、高校生というのは楽なもんだ。遅刻しても、そこまで  
マイナスにはならない。もしこれがサラリーマンだったら、と思う  
と冷や汗ものであるが、僕はあくまで高校生。いくら遅刻しても、  
せいぜい先生にどやされるくらいのもんだ。だったら、別に遅刻し  
てもかまわないよな。

そういう、「ま、遅刻してもいいか」的な気分が僕の中で広がり、  
それがペダルを踏む足にまで伝わったのだ。

結局僕を乗せた自転車は、ガクンとスピードを落とした。

チリンチリン。

「でも、どうしようかなあ」

僕は、思わずつぶやいた。

もう、一時間目には間に合わない。かと言って、今から登校した  
ら、二時間目には時間がある。

「たすきに短し帯に長し、か」

最近覚えたことわざを、ふとつぶやく。ま、間違っ  
て覚えているのはいつそご愛嬌だけれども。

とにかく、時間がある。どうしようかな。

こういうときに、僕がやることは決まっている。

街の散策。これだ。

街の散策って、けっこう楽しい。色んな理由はあるが、「自分  
の知らない所を知るのが楽しい」からだろう。

普段、自分と出会うはずのない人たちと出会えるかも知れない、  
という期待のようなものがあって、ワクワクとするのだ。

まあ、とは言っても、そういう人たちと出会うことってというのは、

本当に稀なんだけど。

実際のところ、出会えなくても構わないのだ。

「人と出会えるかも」っていう淡い想像（妄想）が、散策の醍醐味なのだから。

僕は、自転車のハンドルを傾け、通学路から延びている、細い横道に入った。

この横道は、新興住宅街に続いていた。

昔この辺りは古い工場が立ち並んでいたけど、最近取り潰されて住宅街になった。

だから、この辺りの光景は新鮮だ。

5月の風を受け、僕の自転車はシャーッと住宅街の間を抜けていく。

時計を眺めると、9時を表示している。人っ子一人見当たらない新興住宅街を見渡して、そりゃあ人が見当たらないわけだよ、と僕は思わずつぶやいた。

朝の9時って、サラリーマンはもう会社に行ってるし、かといって主婦の皆様は家事をしている時間だからだ。

こんな時間に出歩いているのは、暇な学生だけだ。……いやいや、違うか。

思い出したように上を見ると、「俺のことを忘れんなよ！」と言わんばかりに太陽がさんさんと輝き、僕の首元を焼く。

5月の太陽も日差しが強いんだな、へえ。と僕は思った。

まるで誰もいないんじゃないかと思わせるほど静かな住宅街をサーッと抜けると、目の前に、今までとは違う色彩が目飛び込んできた。

緑。毒々しさすら感じるくらい鮮やかな緑色。

「きれいだなあ」

思わず、僕はつぶやいた。

どんなに毒々しかろうが、緑というのは心が和むものらしい。

日本人がこの季節に、「初夏」と特別な名前を与えたのは、きつ

とこの緑を讚えるためなのだろう、きつと。僕は、なんとなく、そう思った。

よく見ると、その緑の鮮やかな空間は公園だった。

どうやら、新興住宅街よりはるかに古い公園らしい。それが証拠に、公園を区切る木の多くが大きく、鬱蒼としている。もしこの公園が最近出来たものだったら、若い木がたくさんあってしかるべきだろう。

そして、木で囲まれたスペースの内側に、ジャングルジムや滑り台やらといった「公園の定番」が配置されている。

「へえ、こんなところにねえ」

僕は自転車から下り、自転車を引きながら公園に入ってしまった。

……でも、こんなところに公園があつたかなあ。

僕は公園の入り口で首をひねった。

僕は、生まれてこのかた、この街に住んでいる。にも関わらず、こんな公園見たことがない。

あ、でもここら辺には遊び友達がいなかったな、と、ふと小学校時代の友達の顔を思い出す。

公園の中は、木陰によって日差しから守られ薄暗い。おかげで、空気がひんやりとしている。

しかし、ここでも太陽は自己主張をやめないらしく、葉のスキマから、木漏れ日が落ちてきている。

ぱつと見、何か荘厳な雰囲気すら醸している。

だが、奥の方を見ればジャングルジムや砂場、ブランコが見えるから、「ああ、公園なんだな」と納得できる。

僕は、公園を見渡した。

ひんやりとした公園の空気が、僕の頬をなでる。

僕は、嬉しくなった。

自分しか知らない秘密スポット発見！！これは、散策を趣味とする僕にとってはこの上なく嬉しい。

一人、達成感のようなものに酔いしれる僕であった。

と・・・・・・・・。

キコ・・・・・・・・、キコ・・・・・・・・。

何かがきしむような、しかも特定の律動をもって響く音。そんな音が公園に響く。

僕が音のするほうに振り返ると、一陣の風が僕の髪の毛を撫で、流れていった。

僕の視線の先には、ブランコがあった。

【1】（後書き）

感想、批評、お待ちしております。

雨と僕と女の子

ブランコの方からキコキコと音がした場合、「ブランコを誰かが漕いでいる」と考えるのが最も自然だ。

だけど、こんな時間に？僕は首をかしげた。

繰り返すが、午前9時という時間帯は、皆忙しい時間帯なのだ。

主婦は皿洗いや洗濯に忙殺されてるだろうし（今日はカンカンに晴れてるんだからなおのことだ）、仕事を持っている人たちはもう出社してなくてはならない。ブランコに一番用があるだろう子供も、もう保育園や幼稚園に行っているし、学生だって、もう授業中なのだ。

この時間にブランコを漕ぐ人間なんて、「授業に遅刻して暇を持て余している学生」くらいのもんだ。・・・あ、それって、僕のことだ。と、僕は一人苦笑する。

だが、いたのだ。ブランコを漕いでいる人間が。

今日は暑いというのに、長袖のシャツをまとい、デニム地のスカートをはいた少女。だいたい僕と年代だろうか。

ショートカットの髪の毛を揺らし、ブランコを懸命に、まるで天に届かんばかりに漕いでいる。ブランコの柵には、足の長いダックスフンドといった感じの犬がつながれている。この娘の犬だろうか。その犬は、“飼い主”のブランコの律動を、ただ目で追って、豪快なあくびをしている。

あの子も授業サボってるのかな。僕は思った。その少女は見た目は僕とほぼ同年代。きつと、高校生だろう。

僕がブランコの方に近づくと、少女はブランコを漕ぐのをやめ、僕の方に視線を向けた。いや、視線、というよりは……。

睨みつける、そう、これだ。少女は睨みつけるように、僕の顔をのぞく。

なんだなんだ、僕ってそんなに怪しいかな。彼女の、まるで猛獣

を見るような目に、僕の心はちょっと傷つく。

でも、あの目は……僕は思った。

あの目は、睨みつけてるのはちょっと違うかな。僕は、彼女の  
双眸そごほうに映し出されている彼女の心を読み解こうとしたが、どうにも  
上手くいかない。

僕は何も言えず、彼女の顔を眺めているしかなかった。

彼女も、それは同じようだ。……そして、結果、沈黙。

うーん、この沈黙、気まずいなあ。僕は額から汗を流した。

犬だけが、まるでこの沈黙を嫌がるようにクーンクーンと鳴いて  
いる。

ん？犬？僕の頭の中で、「！」が踊った。よし、この犬をダシに  
……。

僕は自転車を止め、犬の頭を撫でた。

「僕さあ、犬、好きなんだ。」

彼女は視線だけよこして何も言わない。僕は続ける。

「昔ばあちゃんの家で柴犬飼っててさ。そいつが人懐っこくてか  
わいかったなあ」

またもや無言。僕はめげずに続ける。

「まあ、五年前に死んじゃったけど」

やっぱり無言。それでもめげずに僕は続ける。僕が頭を撫でてい  
る犬は、「ワン！」と吼えた。

「このダックス、君の？」

そう問いかけると、彼女はようやく口を開いた。

「あなた、本当に犬好きなの？」

まるで難詰するような口調に、僕はちょっと驚いた。彼女は続ける。

「そもそも、犬を撫でるときはそんなグアシグアシやつちゃダメ  
よ！それに……」

彼女の難詰口調にタジタジになりながらも、僕は話を先に促した。

「それに？」

「この犬は、ダックスフンドじゃありません！アメリカンビーグ

ル！犬好きを名乗るんだつたらそれくらいは知ってなさいよ！」

あちやく。アメリカンビーグルっていう犬種なのかあ、お前。僕は“アメリカンビーグル”君をグワシグワシ撫でる。すると、犬は嬉しそうに「ワン！」と吼えた。

「で、何の用よ」

いちいち口調に棘のある女の子に若干辟易へきえきしつつ、僕は答えた。

「用がないからって、話しかけちゃいけない、って法はないよね」

「でも」彼女は無表情で言った。「見知らぬ人に話しかけるときには、何がしかの用事があつてしかるべきよ」

「そうかな」僕は返した。「別に、“犬の可愛さ”を共有するために、犬好きそうな、見知らぬ人に話しかけるのは普通のことだと思っけど」

「普通、ね」彼女は言った。というか、つぶやいた、というほうが正しい。

彼女は、今度は僕に届くような声で言った。

「その“普通”って言葉、あたしの前で使うの止めてくれない？その言葉って、「普通の枠」に収まらない人を異端扱いにする言葉なのよね」

き、気難しい子だな。僕は思わずのけぞった。

でも、普通っていう言葉は便利な言葉だ。「普通」の食事、「普通」の服、「普通」の家。そんな風に普通のものを選び取っていけば、割と人生楽にいく仕組みになっている。「普通」って、物事を決めたり評価したり、選び取ったりするときには非常にいい尺度だ。でも、この子はその尺度を、「あたしの前で使うな」と言う。なんで、そんなことを言うのだろう。

僕は、首をひねった。

「ま、とにかく」そう言うと、少女はまたブランコを漕ぎ出した。「あたし、知らない人と話したくないの。ただそれだけ」

ショートカットの髪の毛が、ブランコの律動にあわせ、揺れた。僕は、そんな彼女のショートカットの髪がゆれる様子を、ただ見ていた。キレイだな、って柄にもなく思った。

僕と彼女の犬は、そんな彼女を眺める。犬は、そのうち興味をなくしたのか、あくびを一つ打って、地面に伏せてしまった。

裏切りものめ。僕は、横であくびをかく犬を恨めしく思った。

「でもさ、一つ、聞いていい？」僕は、恐る恐る彼女に訊いた。

「なによ」やはり、迷惑そうな、気の無い返事を彼女は返してきた。

「君、学校は？だって、君は高校生でしょ？」彼女の気のない返事にちよっとくじけそうになりながらも、僕は訊いた。

そう。朝の9時にブランコを漕いでる若い娘なんてまずいない。いるとするなら、それは僕のように不真面目な高校生くらいのもんだ。

だから、僕は気になっていたのだ。なんでこの娘はここにいるのか、と。学校は大丈夫なのか、と。

すると少女は、ブランコをさらに漕ぎだした。まるで、天に向かって漕ぎ出すように。

そして、言った。まるで、吐き捨てるように。

「世の中の17歳が、すべて高校生だと思っただら大間違いよ」

「え？」

僕は首をかしげた。

「……だから」彼女はじれったそうな顔をして、続けた。

「あたしは理由あって学校に行っていないの」

「ああ」僕は手をぽんと打った。

でも、なんで学校に？僕はさらに首をかしげた。

僕にとって、学校は楽しいところだ。友達もそれなりにいるし、勉強もそれなりに楽しい。まあ確かに嫌な事もある。でも、そんな物は目をつぶってしまえばなんてことはないし、少なくとも、こんなところでブランコを一人で漕ぐよりは楽しいはずだ。

そんな僕の考えを見透かしたかのように、彼女はつぶやいた。

「あなたにとっては、学校は楽しい処なのかも知れないね。でも、あたしにとっても楽しい処とは限らないんじゃない？」

そういうものなのかもしれない。と、僕は思った。

学校つていうところは、いたいけな子供を原料に「普通」の人材を作る社会のパーツ製造工場みたいなものだ。口では「個性の尊重」だ、「個性を伸ばす教育」だ、とは言っても、結局は勉強や社会のルールを詰め込み、一定の人材を作り出す。そして世にそういった人材を供給する、それが学校なのだろう、きっと。

この女の子のように「普通」を拒絶する子にとっては、そんな普通を押し付けるような「学校」という場所は楽しくもなんともないのだろう。僕にとっては楽しい学校。その裏では、楽しんでいない人が一定数いる。なんだか、背中が寒くなるような思いをした。

「それより」彼女はブランコの律動を緩めた。「あなた、時間は大丈夫？」

僕は思わずデジタル時計に目を向けた。

ゲゲ。もう九時半。このままじゃ二時間目も遅刻してしまう。

「……………あなたは学生なんでしょ？」

彼女は、「あなたは」にアクセントをつけて、僕の身なりをまじまじと見ながら言った。

僕の学校は制服校で、別に着崩す必要性も感じていなかったから、紺のブレザーを普通に着ている。だから彼女にも判ったのだろう、僕が高校生だという事が。

「うん。もう行かなきゃ、時間だ」

僕は犬に手を振って、自転車にまたがった。

「じゃあね」僕は、彼女の無表情な顔を見て、そう言った。僕はペダルに足を掛けた。その時だった。

「ちよつと待って！」

彼女が僕に言葉を投げかけた。僕は思わずペダルから足を離した。なに？と僕が聞くと、彼女はちよつと間を置いてから、言いにくそうに言った。

「……また、会えるかな、あなたに」さっきまでの難詰口調とは違う、優しい声だった。いや、優しい声、というよりは……むしろ、まるで哀願するような口調。

「ん？ああ、会えると思うよ。今日はたまたま一時間目をさぼっちゃったからここにいますけどね」僕は頬をポリポリやって答えた。

「あたしは、毎日この時間に」女の子は、柵につながれていた犬を指した。「この子の散歩をして、ここでブランコを漕いでる」

犬は、ふあ〜つとあくびをした。さっきからあくびの多い犬だ。

「うん、わかった。毎日はいえないけど、気が向いたらここに来るよ」

「うん、うれしい」

さっきまで無表情だった彼女は、ふつと笑った。

それが、彼女と僕との出会いだった。

なんだか釈然としない、というのが僕の感想だった。

だって、「見ず知らずのヤツが話しかけてくるな」と言ったと思つたら、「また会いたい」なんて正反対のことを言う。

乙女心に春の空、てか。と、僕は覚えてたての熟語を思い浮かべる。……やっぱり、覚え間違えてるけど。

けれど、そんな矛盾を抱えてブランコを漕いでいる彼女は、たしかに居たんだ。

僕らが生きる、この社会に。

雨と僕と女の子

それからというもの、僕は大体週に一度のペースで彼女に会いに行った。

なんで、って？

正直、わからない。

彼女が言外に「また来い」というのだから、行くのが礼儀というやつだろう。でも、それだけだったら彼女に会いに行く理由にはならない。しかも、わざわざ一時間目を丸々潰して、先生にどやされてまで、足を向ける理由にはなるまい。

僕は、そこらへんの立て込んだ事情をすべて置いて、新興住宅街を抜けた先にある公園へ向かうのだ。

わからないから。わかりたいから。

公園、といえば、あの公園について誰も知らないことも驚きだった。

中学高校と付き合いのある友達数人に、例の公園のことを訊いてみても「知らない」の一点張り。ほら、あそこらへんだよ、と説明しても、「あそこは以前は工場街で、公園なんてなかった」とみんなが口をそろえて言う。

あんな、鬱蒼と木々が茂る公園だから、最近出来たわけじゃなさそうなのに。僕は首をかしげた。

そういえば、こんなことがあった。

「なんでそんな公園のことを訊くんだ？」とある友人に聞かれ、僕が事情を話すと、その友人はニヤニヤして言った。

「はは、くん、お前、その娘にホレたか？」  
んなワケあるか！と僕は言い返した。

でも、あながち否定が出来ないのが痛い。とはいっても肯定、と

いうわけではなく、「否定する材料がない」ということなんだけど。もしかすると、僕は材料が欲しかったのかもしれない。

そういう恋愛感情みたいなものを、否定、あるいは肯定するための材料を。

そんな、若干<sup>よこし</sup>邪まな感情を隠して、僕は彼女に会いに行く。

午前九時ころ、犬を連れて公園にやってきて、犬をブランコの柵にくくりつける。そして、ブランコを漕ぐ。その一連の作業を、彼女は「日課」だと言った。そして、そんな「日課」を消化している彼女に、僕はたまに会いに行くのだ。ブランコの前の柵に腰を預け、彼女の犬を撫でながら、彼女と話すのだ。

そしてその日も、僕は犬の頭を撫でながら言った。

「ねえ、こいつ、随分年がいつてるみたいだけど、何歳？」

すると彼女は、五月の暑さで顔を火照らせて答えた。

「ああ、あたしと同年だから、17歳ね」

じゅ、十七歳！？小型犬としてはすごい長命だ。お前、爺さんなんだな、と話しかけると、犬はワフ、と半分くらいあくびが混じった返事をした。

「人間に換算したら、100歳は優に超えるんじゃない？」思いつ出したように彼女は言った。

お前、仙人か何かか？僕は、「仙人犬」の下あごをなでる。犬は、クーンと嬉しそうに鳴いた。

ああ、やっぱりただの犬だわ、と僕がつぶやくと、彼女は笑った。「それにしても」彼女は木々に覆われている空のほうに目をやった。「今日も暑いわね」

それはそうだ。五月ってというのは、意外に暑い。古人たちが「初夏」と呼んだのもむべなるかな。

でも、彼女が暑いのはそれだけが理由ではない。

彼女は、この暑い気候に、厚手の長袖シャツを、きっちり纏っている。傍目で見ても、相当に暑い格好だ。

そんなに暑かったら、袖をまくしあげたりすればいいのに。

その旨を言うと、彼女は突然怒り出した。

「あなたに何がわかるの!？」

まるで、心の一番奥底からひねり出したような、悲壮で、強い拒絶を秘めた声。まるで彼女が悲鳴を上げてるようにすら感じた。

僕は、そんな彼女に接ぐ言葉を見つけ出せずに口をパクパクするしかなかった。

すると彼女は、伏し目がちにして、言った。

「ごめん。あなたに怒ることじゃない」

今度は一転して力のない声になった。まるで、何かを諦めてしまったように。

え、どうということ?彼女の感情の急変に僕はついていけない。混乱した頭をざっと整理する。

彼女は僕の発言に突然怒り出した。そしてすぐそれを引つ込めた。そうであるからには、「僕の不用意な発言に彼女が怒り、それは大人気ないと考え直して怒りを納めた」といったところだろう。だけど、腑に落ちないものがある。たぶんその「腑に落ちない」という気分は、その場にいた者だけが感じられる「雰囲気」のようなものなのだろう。

理屈で考えればつじつまは合う、だが、腑に落ちない、という僕の精神状態を説明するには、「雰囲気」というあやふやなものを根拠とせねばならない。

それじゃあ、今の君の怒りは、誰に向けたものだったの?純粹に僕はそう聞きたかった。彼女の想いがいまひとつ分らないから。でも。

僕には、その言葉が出なかった。

いや。正確には。

彼女が僕に、その言葉を口に出すのを許さなかった、と言うほうが正しい。

彼女の醸す、「これ以上この話に踏み込むな」という雰囲気を、僕は感じ取ってしまったのだ。

だから、この話はここで切れてしまった。

彼女の、あの怒りはなんだったんだろう。だれに向けた怒りだったんだろう。僕は必死に考えたが、結局分からずじまいだった。

でも、その答えを、僕はそのうち知ることになる。

そんなことは露知らず、あたふたと当時の僕は話の方向を転換した。

五月の太陽もさんさんと輝いて、木の葉の隙間から、光を公園に投げ入れていた。

その光を、僕らは目を細くして眺めていた。

彼女は、感情の起伏が激しかった。コロコロ笑ったかと思えば次の瞬間には怒り出す。かと思えばまた笑い出す。いくら「女心とナントカ」と言えど、そろそろ僕も不審に思い始めた。

それに、やっぱり気になったのは、彼女の長袖。

今年は例年に比べ暑い。街中を見渡すと、暑さに耐えかねたのか衣替えを前倒ししている人も多い。

なのに彼女は「暑い」と言いながら、長袖のシャツを着ている。季節感がない、の一言で済む問題なのかもしれないが、なんだか僕の心に引つ掛かるものを感じた。

そんな、引つ掛かりを引きずったまま、彼女に会いに行くうちに六月に入った。

あれだけうるさく輝いていた太陽も、さすがに梅雨前線の厚い雲には勝てないらしい。

曇りがちの日々、そして長い雨の日々がやってきた。

ムシムシとしてイヤな季節だが、これを切り抜ければ嫌味のない、真夏というステキな季節がやってくる。多分、みんな、そう言い聞かせて梅雨という季節を乗り切るのだろう。ザアザア降る雨に文句を言うわけにいかない僕らは、先にあるステキな季節を思い浮かべて茶を濁すしかないのだ。それが、雨の下で生きる者の宿命なのだろう、きつと。

その日も、雨だった。六月だからしょうがないとは言え、やっぱりちよつとへこむ。いくら「先にあるステキな季節を思い浮かべて」も、こういうときは無駄である。そして、お決まりのように、僕はため息を吐いた。

自転車通学、というやつは晴れているときにはなかなか快適で楽なものだが、雨となると事情は一変する。教科書の類が濡れるわ、片手で傘を差すからバランスを取るのが大変になるわ、足は結局濡れるわ、さんざんだ。

だが、大抵自転車通学をしているやつというのは、「歩くには遠いし、かといってバスなんかもない」という、「たすきに短し帯に長し」な位置に家が建っている連中なので、結局、自転車に乗って通学するしかない。

僕もその例に洩れず、通学バッグをビニールに包んで前カゴにおいて、片手で傘を差しながら、ペダルを漕いで足を濡らすのだ。

その日も、僕は雨の街を自転車で滑りぬけていった。こういう日には、あまり人とすれ違わない。すれ違っても、皆、大きな傘で自らの上半身を包むから、顔を伺う事ができない。

いや、もしかしたら。僕は思った。

皆、こういう日には、顔を隠しているんだ。雨のせいで機嫌が悪くなっているのを、悟られないように。それが、ルールなんだ、とそんなことを考えながら僕が自転車を漕いでいると、突然、ブチッ！という音が辺りに響いた。いや、今日は雨だから「響いた」という表現は適切ではないかもしれない。とにかく、僕の耳に、「ブチッ！」という嫌な音が響いたことは事実なのだ。

何だ？と反射的に思った僕だったが、聞かなかったことにしてペダルを漕ぐ。だけど、ペダルが異様に軽い。そのくせ、どんどん自転車のスピードが落ちていく。

これはもしかして………。  
もしかした。

自転車のチェーンが、見事に外れていたのだ。

僕の自転車は普通のママチャリだから、チェーンの周りにはカバーがついている。そのカバーが、見事にチェーンの再装着作業を妨げる仕組みになっている。

なんでこんなカバーを付けるんだよ！と、僕はママチャリのチェ

ーン周りにカバーを付けた自転車メーカーを、心の中で非難する。  
でも……………。

「どうしよう……………」僕は思わずつぶやいた。

今僕が立っている位置は、学校と家の、丁度中ごろ。どっちに向かうにも歩きでは遠い。

かといって、ここで自転車を直そうとすると、びしょぬれになってしまう。

どこか、ないかな。ここから近くて、雨宿りになりそうなる……………。

「あつた」僕の頭の上で、電球が点滅した。

あの、公園。あともう少し行くと、例の公園に続く道に差し掛かる。それに、木々が生い茂ってるから、雨宿りにもなる。

それに。

あの子がいるかもしれない。そんな、妙な期待を胸に、僕は公園へ足を向けた。

雨の住宅街を、自転車を引きながら歩く。

ザアザア降る雨で、少し先の家も霞んでいる。足元はちゃぶちゃぶ音がする。

あゝあ。運動靴にも水が染みこんじゃったよ。僕は、暗い空模様に向かって睨みつけた。

でも、あの子、いるかなあ。僕は、一人で歩く暇を持て余してつぶやく。

僕は腕時計を眺める。今、8:02を指している。この時間じゃ、あの子はまだいないだろう。それに。僕はまた、水滴が後から後から落ちてくる、忌々しい空を眺めた。今日みたいな雨の日だ。あの子も、きつと今日は家でのんびりと過ごすんだろう。

そこまで考えて、そういえば、あの子どこに住んでるのか知らないや、と思いついた。

いや、どこに住んでるのか、というより。僕はさらに考える。

彼女のこと、何も知らないや。僕は思わずつぶやいた。

そう、彼女のことを、僕は何も知らない。そもそも、彼女とはあの公園で会って、話をするだけの関係。彼女がどういう家に育ち、どういう物の考え方をしている、どういう食べ物が好きで、どういう男の子が好きで……最後の最後は僕が本当に知りたい情報だけ、とにかく、彼女の全てを知らない。

向こうもそうだろう。ただ、ある日話しかけてきた不審な高校生、そのくらいのことしか彼女は僕のことを知らない。

そもそも、僕らの接点なんて、馬鹿馬鹿しいほどに、か細いものなんだ。

いや、それも違うかな。僕は思った。

実は、誰との接点だって、実は馬鹿馬鹿しいほどに、か細いものなのかも知れない。

今いる友達だって、そのうち大学に進んだり就職したりして離れ離れになる。中には、一生ものの付き合いになる奴もいるんだろう。でも、現在のように毎日毎日遊べはしないんだろうし、会うことも稀になるんだろう。それじゃあ、「接点」なんて望めない。

意外に、人って、つながってないんだな。僕は、ふうとため息を吐いた。

すると、「そんなことないよ」と言わんばかりに、空は大粒の水滴をドバドバ落としてくる。

「慰めてくれるのはありがたいけどさ」僕は空を、ビニール傘ごしに睨んでつぶやいた。「慰め方、つてやつがあるだろ？」

人の慰め方を高校生に諭された空はその機嫌を損ねたのか、さらに落ちてくる水滴の数が増えた。ビニール傘にぶつかる水音は、まるであの子がコロコロ笑っているように聞こえた。

「なあんだ」僕は言った。「慰めていたんじゃなかったのか。笑ってたんだね」

雨音は、コロコロと笑い続ける。

「そういえば」思い出した。「僕、あの子の名前も知らないや」雨音は、やっぱりコロコロと笑い転げる。

「そんなに笑うなよ。大変なんだよ。人間つてさ」

17歳のガキが生意気言うなよ、と言わんばかりに、雷鳴が轟いた。でもなあ。僕は雷鳴に身を少しすくませながら、思った。

なんだか、今日はセンチメンタルな日だなあ。

きつと、「雨季」という憂鬱な季節だから、ポロポロ気持ち漏れ出て、心を濡らすのだろう、と、僕はなんとなく思った。

そんなこんな考えているうちに、人気のない住宅街を歩ききり、例の公園に辿りついた。いつもは自転車で来ているからそんなには感じなかったけど、けっこう遠かった。

時計を見ると、8:27を指している。つまり、30分くらい歩いていたことになる。

道理で友達がこの公園を知らないわけだ。僕は一人合点がいった。

小学校のときの行動半径じゃあ、歩いて30分も掛かるほど遠いところへまでは遊びに行けないし、遊びに行く理由もない。

例の公園は、雨が降っていろいろがいつもと同じだった。

ひっそりと静まり返った公園。鬱蒼と木々が生い茂り、中の様子は分からない。ただ、外から見ると、雨のせいでその輪郭がぼやけて見える。それくらいが普段との違いだ。

僕は、後ろの方で鳴る雷鳴に背中を押されるようにして、自転車を引いて公園に入った。

あてが外れた。僕は、思わずそう思った。

あれだけやる気満々だった太陽光をさえぎる力がありながら、木の葉たちは水滴を防ぐ力はないらしい。あまり、外の天気と変わらない。でも、考えてみればそうに決まってる。

木の葉が100%水を防いでしまったら、木はどうやって水を得るといふんだ。

頭の回転の鈍さに、苦笑いするしかなかったが、考え直し、出来るだけ雨に当たらない箇所で自転車のチェーンをはめ直しはじめた。チェーンのカバーを壊す勢いで曲げ、外れているチェーンを掴む手を見ると、油で汚れている。機械油特有の、どす黒い油。

雨くらいでは、流れ落ちそうもない。

手の汚れを気にしながらも、ようやくチェーンをはめなおした。

後輪を上げてペダルを手で回すと、キュルキュルと音を立てて後輪が回りだした。

よし、もういいか。

僕は自転車を立てると、トイレの洗面台に向かった。機械油で汚れた手を洗い流すためだ。この雨足でも落ちない油なんて、果たして水道の蛇口の水程度で落ちるかは疑問だけど。

僕は傘を背負うようにさして、公園内を歩く。頭上のポタポタという水音と、足元のびちゃびちゃという水音が、不協和音を響かせる。

だが、そのうち気づいた。

その不協和音の中に、何か水音とは違う音が混じっているということだ。

金属同士がこすれるような音。それが、確かな律動をもって響く。けれど、その音はきわめて微かで、水音にまぎれてしまつくらい小さい。

でも、僕には聞こえる。

キコキコ、という音が。

そしてその音の先には。

五月雨によって霞んではいたが、ブランコが、確かにあった。

ブランコが、鳴っている？

僕は、奇異な感じを受けた。こんな雨の日に、ブランコを漕ぐ人なんていない。かといって、今日は風は吹いていないから、ブランコが自然とゆれる、なんてことも考えられない。

けれど、聞こえる。

キコキコという律動を持った音が。

ブランコは、まるで霧のように降りしきる雨によって霞んでいる。だれかいるのかも、ここからじゃよくわからない。

でも、もしかしたら。

あの子かもしれない。僕は、なんとなくそう思った。

普通に考えて、こんな雨の日に、公園にあの子がいて、ブランコを漕いでいるはずはない。でも、あの子だったら、いるかもしれない。だって、あの子は、「普通」を嫌う女の子なのだから。

僕がブランコに近づくと、どんどんブランコの輪郭がはっきりと現れていった。

カラフルな鉄骨。柵。鎖。そして最後に、女の子の輪郭が、僕の目に入った。ブランコに座って、雨でびっしょり濡れながらほんの少しブランコを漕ぐ、女の子の姿が。

あれ？あの子じゃない。

僕は、その光景を見て、そう思ってしまった。

だって、いつもあの子は長袖のシャツにデニム地のスカートというでたちなのに、今、僕の前にいる女の子は半袖のTシャツに三本線のジャージの下をはいている。そして、犬を連れていない。

それ以上に、その女の子の醸す雰囲気、いつものそれとは違った。

まるで、泣いているようにさえ、見えた。だから、声をかけるの

を一瞬ためらってしまった。あの子であれ無かれ、声がかげづらかったのだ。

「ああ、こんな雨の日に、会いに来てくれたの？」  
ブランコに座る女の子は、僕の姿を見つけて、言った。

僕も、ようやく理解した。雰囲気はいつもと違うが、あの子だ。

「うん」

僕は、ただ、そう答えた。すると彼女は地面を少し蹴った。ブランコが、キコキコと音を立て、また止まる。

「なにかあったの？」僕は相手を妙に刺激しないように、抑揚を込めずに聞いた。

雨の日に下を向いてブランコを漕ぐなんて、何がしかの事情がないかや普通やらない。そう思ったから、僕は訊いたのだ。

彼女は、まるで僕のことを値踏みするような目で僕を見た。そして、目を虚空に向けてから、言った。

「あたしね、普通じゃないの」

「え？」

「普通じゃないから、ダメなの」

「何を・・・」言ってるの？と言いかけて、僕は口をつぐんでしまった。彼女の目が、あまりに真剣だから。

いや、そうではない。彼女は、僕に、しゃべって欲しくないんだろう。まるで、「しゃべらないで」と僕に哀願するような双眸が、僕を見つめる。

きっと、聞いて欲しいんだ。何かを。

そう思ったから、僕は、彼女に投げかけたい言葉たちを、一生懸命に飲み込む。

彼女は、まるで独り言のように続けた。

「あたしね、本当は普通がいいんだ。

普通に学校行って、普通に恋して、普通に友達を作って、普通に生きたい。でもね、あたし、ダメなの。何でか、普通には生きられないの」

彼女は、一息付いて、続ける。

「あたしみたいにズレてる人間にとって、この世界は生き辛いのかも知れない」

彼女は、嘆息をした。

僕は、普通の人間だからわからないけど、ズレている人間から見ると、この世界はどこかよそよそしいものなのかもしれない、と、なんとなく僕は思った。

普通のレールに乗れない人間。それゆえに、「普通」を恨む少女。彼女は、下を向いて続ける。

「あたし、これでもね、中学までは普通だったの。普通に中学に行つてさ。普通に友達もいて。そういえば、月並みに恋もしてたっけ。でも、中学二年のときだったかな、クラス替えがあつて」

ここで彼女は一息置いた。そして、まるで何かを吐き出すように言った。

「一人になつちやつた」

クラス替え、というのは、多感な中学生にとって、大事な要素だ。クラス替えによって新たな友達ができる事も多いが、一方で、孤立してしまうこともある。

クラス替え、というイベントの波に乗り切れず、一人になってしまふ子。そんな子は古今東西どこにでもいる。でも、僕は、そういう子の気持ちを考えたことがあつたらうか。

女の子は、空を眺めた。僕も、彼女に合わせ、視線を空に泳がせる。木々から零れ落ちる水滴が、きれいだった。まるで、少女の話をあざ唾うかのように次から次へと落ちてくる、そんな雨だった。そんな雨に打たれ、全身を濡らしながらも少女は続ける。

「それで、気がついたらクラスでも浮いちゃって、もどろにかしなきゃ、って思った。どろにか、あたしは自分の居場所を見つけようとした」

でも。彼女は、言葉を継いだ。

「ダメだった。」

もう、あたしの力じゃどうしようもなかった。だから

だから。少女は、つぶやく。

「学校に行くの、止めたんだ」

クラスになじめず登校拒否。よく聞く話だ。でも、どうしてもつとがなければなかったの？なんで、レールの上に戻るうとしなかったの？と僕は思った。

そんな僕の心を見透かすように、彼女は言った。

「ダメなの。一回レールから外れちゃうと、もう戻れないの。どんなに頑張っても。」

・・・そんな顔するけど」

彼女は、僕の顔を指して言った。

「あなたは、戻れるの？一回外れたレールに」  
分からない、というのが、僕の正直な感想だ。

僕は普通というレールの上から転げ落ちた事はない。それどころか、「あわや」という場面もなかった。彼女がどうにか戻りたいと願う「普通」というレールに、ただただ乗っかって日々を過ごしていたような僕では、もしかしたら彼女の痛みを理解してあげられない

いのかもしれない。

彼女は、そんな僕を半ば呆れたように眺めて、続けた。

「登校するのを止めるようになってから、あたしは家にこもった。あたしのことを認めてくれないこの世界がいやになっちゃって」

それは、違う。僕は心の中で訂正した。

世界がイヤになったわけじゃないんでしょ？イヤになったのは恐らく……。

彼女は不意にハハッと笑った。

「……あなた、意外に鋭いのね」

「僕、何か言ったっけ？」僕は頭をかいた。

「顔」彼女は僕の顔を指した。「あなた、顔に出すぎ」

僕は、自分の面の皮をつまむ。この、正直ものめ、と心の中で叱りつけながら。

彼女は、さらに続ける。

「そう、イヤになったのはこの世界じゃなく、あたし自身」

彼女は、地面を蹴って、また続ける。

「なんてあたしはダメなんだ、って思った。

右を見ても左を見ても、あたしみたいにレールを外れた人はいなかった。

みんな、あたしよりすごい。上。

あたしは、みんなよりダメ。下。

ずっと、そう思い続けた。そしたら「  
そしたら。」

「なんだか、自分に価値がないように感じた。

世間をにぎわす死刑囚だって、少なくとも中学校はしっかり卒業してるのよ？じゃあ、それ以下のあたしって、一体何？

そんなあたしが、この世界にいていいの？」

それで。そう言って、彼女は、今までは長袖で隠されていた左手を僕の目に晒す。

僕は、思わず声を失った。目を背けたかったが、背けることさえ

出来なかった。

「サクッと、やるようになった」

彼女の左手には、生々しく痛々しい傷が、まるでルーズリーフの付箋のように、無数に走っていた。これは、もしかして……。

僕がその答えを口に出す前に、彼女は先回りして答えた。

「リスカ」

リスカ。リストカット。それが、彼女が行き着いた居場所だった。彼女は、腕を晒しながら、続ける。

「なんだか、そのうち、左手が自分みたいに見えてきた。ダメな、自分に。普通にさえなれない、あたし自身に。」

そしたら、憎くなった。左手が。

まずは、ボールペンだった。そこらに転がってたボールペンで・

……

「もういいよ」僕は思わず言った。だけど、彼女は続ける。まるで、僕の声が聞こえないかのように。

「……刺した。」

痛かったし、血も出た。でも……

彼女は、笑った。

「嬉しかった。」

ダメなあたしを殺したみたいで、すごい嬉しかった。でも

でも、と言った彼女の顔は、今にも泣きそうだった。いや、もしかしたらもう泣いているのかもしれないが、降り続く雨のせいで、彼女が泣いているかどうか、ここからでは判別がつかなかった。

「結局、あたしは生きてるんだよね、ダメなあたしが」  
彼女は、自嘲気味に言った。そして続ける。

「そしたら、リスカが癖になっちゃった。ダメなあたしを殺すために。」

でも、ダメなあたしは殺せなかった。そしたら、ダメなあたしを殺せないあたしもイヤになっちゃった」

「どうということ？僕は首をかした。」

君は、君じゃないの？ありのままの、君じゃないの？

僕の方を見ないで、彼女は言った。

「ごしごと、傷が無数についた左腕で目をこすってから。」

「だから、あたしは、ブランコを漕いだ」

彼女は僕の顔を見て、言った。

「神様なんて、あたしは信じない。でも、もし、もしそんなものがあるんだしたら、って思って、お願いしてたの。“あたしを助けて”って。ブランコが、一番高いところに触れた瞬間に、そう願うようにした」

「あんなにブランコを高く漕いでたのには、そういう意味があったのか。神様に届けたい想い。神様とて、遠くからお願ひするよりは、より近いところでお願ひしたほうが聞いてくれるかもしれない、と。僕は無責任に思った。」

彼女は、続けた。

「そしたら、あなたがここにやってきた。願ひは、叶ったの」

雨が、またいつそう強くなった。

「あなたは、あたしを助けてくれるかも、って思った」  
でも。」

「あなたは、あたしを救い出してはくれなかった。分かっている。そんなのはあたしの幻想。わがまま。でも。

助けて欲しかった。あたしを、元のレールに引き戻してほしかった」

僕に、そんな期待を抱いていたなんて。

「でも」僕は言った。「これからだつていくらでも……」

僕の言葉をさえぎって、彼女は何かに決別するように言った。

「あたし、引越すの」

彼女は続けた。

「パパの仕事の都合らしいわ。でもきつと、それは口実。きつと、パパもママもあたしの周りの環境を変えたいんだと思う。

それで、あたしを元のレールに戻したいんだと思うの。でも」  
彼女は、いつからか涙をしゃくり上げていた。

キレイな涙だな、と、僕は無責任に思った。

「戻れるのかな、あたし。元のレールに。環境を変えたくらいで」  
彼女は、まるで自問するようにつぶやいた。

「あたし、普通になれるのかな？戻れるのかな」

頑張れ、なんて気休め、言えるはずもなかった。

頑張るだけのふんばりのない人間に「頑張れ」とエールを送ったところで、そのエールは重荷にしかならないだろう。きつと彼女は、「頑張れ」という言葉の重みに押しつぶされてしまったのだろう。

家族の、友達の、そして、自分自身の「頑張れ」というエールに、足を取られ、潰されてしまったのだろう。何て世の中はイヤなものなんだろう、そう思った。

善意の言葉、力を与えるはずの言葉のはずなのに、逆に人から力を奪っていく。

「ごめん、あたし、帰る」

彼女は、ブランコから立ち上がる。そして、僕の前に立った。

「いままで、ありがとう」

そう言うと、彼女は僕の体に手を絡ませ、ぎゅっと抱きついてき

た。

その拍子に、僕が背負うようにさしていた傘が、ぱさつと落ちた。  
「え？え？」

とまどう僕に、彼女は言った。

「ゴメン。こうさせて」

彼女の香りが、彼女の腕が、僕を包んだ。

ここで、彼女を抱きしめてあげるのが僕の役目なんだろう。でも、僕は機械油で汚れた手を、彼女に絡める気にはなれなかった。

どれだけ時間が経っただろうか。彼女は不意に絡めていた腕を僕から離れた。

「もう、行かなきゃ」

そう言っ、彼女は踵を返して、公園から出て行くこととする。

なにか、彼女にしてあげられないか。僕は思った。なんでもいい。彼女に何か……。そんな僕に、ふとさつき落ちた傘が目に入った。

「待って！」僕は半ば叫んだ。彼女は、僕の方を振り返る。

「これ、使って」

僕は、落ちた傘を拾い上げると、彼女に差し出した。僕は、言葉を続ける。

「風邪、引くから」

そう言っ、彼女は笑った。今まで見たことないほどの、まぶしい笑顔だった。でも、こころなしか寂しそうにもみえた。そして、彼女はポツリとつぶやいた。雨にかき消されそうなほどの小声で。

「やっぱり、あなたは、神様が遣わしてくれた人なのかもね」

彼女は、僕の差し出す傘を受け取った。

それが、彼女との別れだった。

一応、週に一度くらいはあの公園に行って彼女を待ってみた。でも、彼女はやってこなかった。きつと、本当に引越したんだろう。雨の降りしきる季節の間、僕はずっと彼女のことを考えた。彼女は、新天地で、ブランコを漕いでいるのだろうか、と。

だとしたら哀しすぎる。

ブランコは、いくら漕いでも前には進めない。ただ、律動に合わせて同じ場所を行ったりきたりするだけだ。もしかしたら、彼女に必要なのはブランコではなく、自転車なのかもしれない。漕げば漕ぐだけ前に進む、そんな道具が、彼女には必要なのかもしれない。

でも、彼女には自転車のペダルは重いだろう。だから、ブランコを漕ぐしかない。そして、ブランコが、かりそめにも前に出たときに祈るんだ。「自分が変われますように」と。

そして彼女は、僕にその願いを託した。

でも、僕は彼女に何も出来なかった。

あの子に自転車を与える事もできなかったし、かといってあの子にブランコから下りるように言うことも出来なかった。

結局、僕は見ているしかなかった。

でも、僕はどうすればよかったんだろう。

僕は、彼女から何を求められてたんだろう。

そして、僕は、彼女の求めたものを、理解できていたのだろうか。「やっぱり、僕は普通の世界で生きてる人間だから、彼女の気持ちには理解できないんじゃないか」とも思った。でも、それじゃいけない気がした。

僕はあの子を知りたかった。あの子の全てを。

でも、結局理解できなかった。

「そんな顔して、失恋かな？」

歴史の先生に、授業中こう訊かれた。よっぽど浮かない顔してたんだろう。

「かも、知れないですね」

僕は素っ気無く答えた。するとその先生は、教科書に目を遣ってから言った。

「忘れたほうがいいぞ。恋愛なんて一時のことだ。今は、勉強勉強」

でも、先生、忘れたほうがいいの？普通のレールから外れた人を切り捨てて、自分だけ普通のレールに乗り続けるほうが賢明なの？

それが、「普通」なの？

喉まで出掛かって、僕はまた、これらの言葉を飲み込んだ。

僕は、忘れない事にした。

彼女のこと。彼女と過ごした公園のこと。あの、出会った日の、印象の悪い受け答えをした彼女の事を。最後に会った日の、彼女との甘い抱擁を。

「そんなもの、心に刻み込んで何になる」って言う人もいると思うし、頭の悪い僕にだって何の意味もないことだってことくらい、わかってる。

でも、僕にはそれしか出来ない。せめて、彼女との思い出だけは、僕の心に刻みたい。

そして、彼女に言いたい。

「君は、一人じゃない。少なくとも、僕がいる」

そんな言葉、彼女は要らないかもしれない。でも、僕にはこんな

言葉しか紡げない。

今は七月。もう、雨の季節は去り、太陽がさんさんと地面を焼く季節になった。僕は、首を陽光に焼かれながら、自転車に乗って通学する。

人々が、暑い暑いと口々に言いながら、陽炎の舞うアスファルトの上を歩く。その人たちの横を、僕は自転車でゴキゲンにすり抜ける。

そして熱風が、僕の頬をすり抜ける。

そんな、むせ返るような暑さの中で、僕は考える。

きつと、あの子は、犬の散歩を口実に、こんなむせ返るような暑い街を歩くんのだ。自分の弱さを隠すために、季節外れの長袖のシャツをまとって。

そして、鬱蒼とした公園で、一人、ブランコに乗って、祈るんだ。

僕は、ため息を吐いた。

そして、僕はペダルをガシガシ漕いで、祈った。

あの子が、ブランコから降りる勇気を持てますように、と。

僕の自転車は、長い下り坂に差しかかった。僕は、ペダルを踏む足を緩めない。自転車は僕を乗せて、長い長い下り坂を、シャーッと滑り落ちていく。

そのまま、彼女に会いに行けたらいいのに。

僕は空を見た。すると、目に、何かが当たった。雨かな？僕はそう思った。でも、こんな晴れた日に？

水滴は、僕の視界を、魚眼レンズみたいにキレイに歪めた。

何も見えないや。

僕はブレーキをかけ自転車から降り、あの子の顔を思い出そうとした。だけど、僕の記憶の中で佇むあの子の顔は、霞がかかったようにおぼろげだった。

そんな僕をあざ笑うかのように、僕の目の前に続く長い坂道は、  
まっすぐ、どこまでも続いていた。

【10】完結（後書き）

遂に完結です。

皆様の感想や批評、お待ちしております。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1631c/>

---

雨と僕と女の子

2009年3月24日09時23分発行